

イケオジ王様の頭上の猫耳が
私にだけ見えている

逆らえない命令

「ああレオポルト、あなたは どうしてそんなに かわいいの」

日光を受けて 燦然と輝く黒い毛並み、キュッと縦線のように細くなった瞳孔を引き立てる鮮やかな黄色い瞳、鼻筋が通っているながらも、主張しすぎない小さな鼻。

まごうことなく完璧な、この世で一番かわいい生き物、それが猫だとリュミア・クラウゼ・ガルトリンは確信した。

レオポルトと呼ばれた猫は、出窓に置かれたふかふかのクッションに寝そべり、間近で喋る人の声に合わせて三角の耳をピクピクさせている。

「なぜって？ それはかわいいからかわいいのよね」

リュミアは先ほどの問いに自分で答え、艶々に光る毛並みをそっと撫でようとした。

「熱っ……」

太陽光を吸収した黒い毛並みは想像以上に熱く、リュミアは手を引つ込める。レオポルトはうるさそうに尻尾をパタパタと振った。

「ごめんごめん。レオポルトは熱くないのね、すごいわ」

リュミアは熱くなさそうな顎下に手に伸ばし、レオポルトのご機嫌を取ろうとした。レオポルトは目を閉じ、されるがままになる。次第にゴロゴロと喉を鳴らし、苦しゅうない、と伝えた。

「うふふ……」

猫を撫でている時間こそ人生最上の喜びだとリュミアは思っている。リュミアはセヴィッツ王国の第四王女として生まれた。淡い蜂蜜色の髪は巻かなくとも適度に波打ち、青い瞳はいつも潤んでいる。

生まれた瞬間から美しい姫だと褒め称えられ、周囲の期待に応えるようにガルトリン家の最高傑作と称されるまでに育った。だが猫を飼うまで、これほどの喜びは人生に存在しなかった。猫はリュミアが王女という身分であることなど一切理解せず、ただリュミアの示す愛情のみをシンプルに受け取り、同じように返してくれる。この濃密な愛の交歓のひとつきが、猫に狂う理由だった。

「リュミア様」

ノックのあと了解もなく扉を開け、侍女のダイアンがやって来た。

「な、なに？ 今は休憩しているのよ」

勉強を怠けてはいない、とリュミアは主張する。

「国王陛下がお呼びです」

その知らせにギクリとしたリュミアは、無言で顔を背けた。

「重要なお話だそうですよ、早くしてください」

ダイアンは真つ直ぐな黒髪と意志の強そうな切れ長の黒い瞳を持ち、見た目通りに厳しい一面が

ある。リュミアを急かすその口調に遠慮はなかった。

「……まさか例のお話かしら？」

「きつとそうです。支度しなければいけません」

美しいと評判のリュミアであるが、国王の計画のため、十八歳になっても婚約者すらいなかった。それでも歴史や古典の勉強、刺繍など花嫁修業を続けている。

「レオポルト……私、どうしたらいいの？」

血相を変えるリュミアを、レオポルトは不思議そうに見つめた。尻尾がばたばた、とクツションを叩く。

「行けばいいんですよ、抵抗はやめてください」

「ああ、ダイアンったら信じられないくらいすごい力」

侍女ではあるが、護衛も兼ねてダイアンは体を鍛えている。運動嫌いのリュミアが敵うはずもなく、引きずられるようにして衣裳室に連行され、身支度を整えられた。部屋を出るときには、リュミアは神妙な面持ちに切り替えた。自室では自分を解放できるが、一步外に出ればそうはいかない。評判を貶めぬよう、常に気を張る必要があった。

国王が待つ謁見の間の天井は高く、中央にはセヴィッツの建国神話が描かれていた。多くの人々と、頭に様々な獣の特徴を表した獣人。この地に立つあらゆる生命を従えたのが初代王と伝えられている。それらを囲う金色の装飾は壁にまで張り巡らされ、現在の富と権威を示していた。大理石の床に敷かれた赤い絨毯の上をはずしと歩き、リュミアは国王ユーージェス二世と、王妃アデライ

ドの前にたどり着いた。

「国王陛下、王妃陛下に拝謁致します」

顎を引き、背筋を伸ばし、長いドレスの中で片方の脚を後ろに引き、もう片方の膝を曲げる優雅な礼をする。重臣や記録官までもが居並ぶこの場に、リュミアひとりで呼ばれたのは初めてのことだ。自分の一生を左右する命令が下ることは間違いなく、緊張せずにはいられない。

「おもてをあげよ」

「はい」

王座にかけたユージェス二世の威厳ある声に従って顔を上げる。リュミアと同じ色をした彼の青い瞳には、相変わらず愛情のかけらも浮かない。むしろ緊張で固くなっているリュミアを戒めるかのようだ。

今まで何度も叱責を受けたリュミアは、ますます萎縮してしまう。七人いるほかの兄弟と比べると成長が遅く、勉強が苦手で、不器用だったリュミアは、父の期待に応えられたためしなかった。存分にリュミアを睨みつけたユージェス二世は、重々しく口を開いた。

「ついにサントイリア国と同盟条約を結ぶことになった」

それは、長らく交渉が重ねられた事案だった。サントイリアは、この国から見て東側に位置する国だ。広大な川によって隔てられているが、水鏡に映るように同時期に国として発展し、過去には何度も戦争を行った敵対国でもある。

「まあ、なんて素晴らしいことでしょう。心よりお祝い申し上げます。歴史に残る偉業です」

リュミアは祝辞を述べる。近年は交戦に至っていないものの、常に侵攻される可能性に怯えてきたサントイリアとの同盟。それだけは心から喜ばしい。国民が傷つくことなく、みんなで平和に暮らせるのなら何よりだ。

ただ、謁見の間にわざわざリュミアを呼び、公式発表の前に知らせる話でもなかった。固唾を飲んで、王の次の発言を待つ。

「——これから両国は過去を捨て去り、新しく親密な関係を築き上げる。その象徴として、お前はサントイリア国王マディウス・フィリド・アイヒンガーの元へ嫁ぐのだ」

それは予期されていた政略結婚の命令であったが、リュミアの心臓は痛いほど脈打った。

「謹んで陛下の命をお受けいたします。この身を、セヴィッツとサントイリアの和平に捧げられる光栄をありがたく存じます」

抑えようと努めたが、リュミアの声は震えた。

サントイリア国王が、自分との縁談を受け入れたとは信じがたかった。交戦状態にないのだから、同盟のみとしてもよいはずだった。

彼は三十五歳と男盛りを迎えているが、数々の縁談を持ちかけられようと、頑なに結婚しなかった。同盟交渉がサントイリア側の遅延行為によって難航し、およそ二年と長引いた理由も、マディウスが結婚を迷ったからという説があるくらいだ。

リュミアはこの二年間、淑女教育と月に数度の公務以外は特にすることのない日々だった。役割を与えられない罪悪感を抱えていたが、いざ与えられると自信のなさが溢れてしまう。

ユージェス二世が腹立ち紛れに王座の肘掛けを叩き、鈍い音が響く。

「みだりに感情を表に出すな。どうしてお前はいつもそうなのだ」

「申し訳ございません」

怒られたリュミアはますます怯え、澄ました顔を取り戻せない。

「よいか、どのようなときもセヴィッツ王女としての気品を保て。アデライド、よく躰けておくように」

「はい」

名を呼ばれた王妃は素早く返事をする。

「リュミア。あちらに行くまでに、王妃の心構えを授けますからね」

淑女の鑑と呼ばれるアデライドは口調こそ優しいが、彼女もまた厳格な性格の持ち主だ。出立の日までは忙しくなるだろう。

「はい、王妃陛下」

返事をしながら、リュミアは悲しくなった。一度でいいから、両親からよくやったと褒められてみたかった。しかしそのときは訪れないだろう。

国のために命を捧げるというなら、王族として捧げられる、だが、生涯をサンティアリアで過ごせと言われると、あまりに果てしない。遠い異国の地で、畏怖の対象だった王と婚姻を果たし、世継ぎを産むだなんて自分にできるのだろうか。それから更に、長い年月を生きるのだろうか。

半年の準備期間を経て、リュミアがサンティアリアに出発する日がやって来た。

季節は進み、暖かい春となっていた。

「うっ、さようならレオポルト……元気でね……ごはんを食べ過ぎないでね。食べてないふりをして、みんなから貰うのはダメよ……」

慌ただしい雰囲気嫌がったのか、レオポルトは寝室のチェストと壁の隙間にいた。リュミアが手を伸ばして眉間から頭を撫でる分には嫌がりもせず、目を閉じてチロツと自分の鼻を舐める。

（本当はこっそり連れて行きたいけれど）

リュミアは何度もその誘惑に駆られて、丁度よさそうな籠まで用意させた。

しかし、自由と日向ぼっこを愛するレオポルトに、長期間に及ぶ不便な馬車移動をさせるのは可哀想でしかない。それに、もし見つかったらどうなることか。猫の持ち込みの不可は聞くまでもなく、道中に別れるくらいなら、と涙を吞んで諦める。

「今まで通り、みんなが面倒を見てくれるから大丈夫ですよ」

共に旅立つダイアンがもう行かなければ、と肩を叩いた。

「そうね、レオポルトはみんなに愛される猫ちゃんだもの、平気よね」

レオポルトは元々、庭園に迷い込んだ猫だった。リュミアが王宮を移動する際、中庭に面した回廊に突然現れた。彼はリュミアの前でニヤン、と一声だけ鳴き、小首を傾げたのだ。そのかわいらしさに忽ち恋に落ち、リュミアは彼を抱き上げて自分の部屋に連れ帰った。友人の貴族令嬢の飼猫の話や、絵画に描かれる姿を見ていつか自分も飼いたいと憧れていたのだ。

当然ながら、周囲は猛反対した。怪しい猫が、嫁入り前の王女の顔にひっかかり傷でもつけたら大変だとして、騒ぎにもなった。

けれど結局、レオポルトの愛想の良さが打ち勝った。リュミアの部屋で寛ぎ始めた彼は長椅子にゴロンと転がり、無防備にお腹を見せてはかわいらしい鳴き声をあげる。飼育をやめさせようと駆けつけた侍女長や王妃アデライドまでも、その姿を一目見るなり寵絡された。

元の飼い主については長期間にわたって搜索されたが、名乗り出る者はいなかった。毛並みの良さからきつとかわいがられていたのだろう、と一抹の罪悪感から、リュミアは日中窓を開けてレオポルトが好きに移動できるようにしていた。けれどレオポルトはリュミアを飼い主と定めたかのようにだった。王宮を歩き回り、あちこちに愛想を売り、ときに姿が見えなくなっても、夜にはきちんと帰って来る。喉を鳴らしてリュミアのベッドに飛び乗り、寄り添って眠るのだった。そうしてリュミアは甘い生活を送ってきたが、ついに終止符を打たなければならなかった。

「さようならレオポルト」

リュミアは最愛のレオポルトに別れを告げる。もう二度と会えないと思うと、涙が溢れて止まらなかった。彼は出会ったときから落ち着いていたため、かなり大人の猫と推定されていた。そして猫の寿命は短く、十年前後だという。その間にリュミアの母国帰りが許される可能性は限りなく低い。

（私は飼い主失格よね……こんな私のことは早く忘れて、幸せになってね）

胸に広がる悲しみは目の前をぼやかせ、ダイアンに支えられて何とか部屋を出る。

出立式にあまり泣いてはいけないとのことで、父母や兄弟など、近親者とは前日までに別れを済ませている。両親は結局、最後まで優しい言葉をかけてくれることはなかった。

王族である彼らは、王宮の正面玄関に整列したりはしない。見送りのために待機してくれたのは、乳母、侍女長、侍女、メイド、近衛騎士などだ。見知った顔ぶれを眺めるとリュミアの胸がいつぱいになる。

多くの人々に支えられて生きていたのだと、今さらになって実感した。

出立式は前例に沿って行われ、儀仗兵が馬車を取り囲み、金管楽器が派手に吹かれた。サンテリアとの取り決めによって、あちらに持ち込めるのは馬車一台分の荷物であるというのに、見せかけの豪華な婚姻行列が組まれた。外側は飾りつけがされているが、中は空の馬車が何台も並ぶ。

リュミアは行列の中ほどの馬車に乗り込み、ドアが閉められる音をいつもより切なく聞いた。間もなく馬車が動き出し、住み慣れた王宮から徐々に離れていく。

この王宮は、リュミアが十八年の人生の大半を過ごした場所だった。王宮の外に出るのは、王妃の慈善事業を手伝って救貧院に行くときのみで、残りの思い出は全てここで作られた。

自分の身体の一部を切り取られたような感覚に陥り、しばらくは喪失感で身じろぎもできなかった。

「……ごめんなさい、ダイアン。あなたまで私の運命に付き合わせてしまって」

王宮が完全に見えなくなってしまったから、リュミアは謝った。ダイアンまでしんみりと押し

黙っていたからだ。ダイアンとは乳姉妹の仲であり、幼い頃から共に育った。謝罪を受けた彼女は、弾かれたように顔を上げる。

「今さら何を仰るのですか。私はリュミア様に一生お仕えするつもりでしたから、ついていくのは当然です」

驚くほど悲しみを感じさせない口調だった。

「それは、役割を果たすため？」

サンテリアへの同行を許された侍女はたったひとりなので、ダイアンについてきて欲しいと頼んだ。彼女は二もなく了承してくれたが、義務感に違いないとリュミアは思っていた。

『役割を果たしてください』とダイアンはいつも言う。それはセヴィッツ王室の教育理念で、感情に流されがちなリュミアを窘める、彼女の口癖でもあった。

「違いますよ」

ダイアンの黒い瞳がふっと和らぎ、リュミアを見つめた。

「リュミア様が好きだからです。役割であっても、好きでもない人のために外国にまでついていて、一生を過ごすなんてできません」

「まあ……」

リュミアは驚いてしまう。

こんなにもはつきりと、自分の感情を語るダイアンは初めてだった。嬉しいけれど、それだけ彼女も別れに際し、動揺しているということだ。

「ダイアン……ありがとう、私も大好き。これからはもつとあなたの言うことを聞くわ」

横並びに座っているダイアンの肩に、ことんと頭を預けた。ダイアンが軽く背中をポンポンと叩く。

「はあ、ちよろくて困りますね」

「えっ？」

「いえ、かわいらしくて困ると申し上げたのです」

「聞こえてるんだから」

リュミアを乗せた馬車を中心として、護衛の一人は国境を越えられる橋を目指し移動し続けた。日が暮れると修道院に泊まるが、それ以外はひたすら馬車に揺られっぱなしだ。リュミアとダイアンは不快な乗り物酔いに苦しみ、腰の痛みにも悩まされた。

（こんな大変な旅程だもの、本当にレオポルトを連れてこなくてよかった）

修道院で飼われている猫を見かける度、胸にぽっかり空いた猫型の穴が、寂しいと存在を主張した。けれど、きつと王宮で快適に暮らしているはずなのだ。

吐き気を軽減させようとリュミアは窓の外を眺める。晴れているが、進行方向の空には暗雲が重く垂れこめ、その光景にこれから嫁ぐ相手を思い浮かべてしまう。

（マディウス・フィリッド・アイヒンガー……）

彼の名前を初めて聞いたのは、リュミアが八歳の頃だ。マディウスは先王の薨去のあと、遺言に

従って王座に就いた。彼は第二王子だったが、数多の戦果を挙げた功績が認められ、第一王子を押し退けたのだという。

川の向こうのお国事情を、リュミアは歴史上の出来事と同じように受け止めるばかりだった。家庭教師の出すテストに出るかもしれないから、といった具合だ。

しかし、用心深いユージェス二世は四人の王女たちを前にこう告げた。

『サンテリアの王は未だ独身だ。もしも侵攻された場合、お前たちを差し出して和平交渉に臨む。その可能性を踏まえ、婚約は可能な限り遅らせるつもりだ』

深刻な表情の姉たちを見上げ、リュミアは少しばかり不穏な気配を感じ取った。それでもまだ、自分に関係があるとは思えなかった。

王になってからのマディウスは千年の平和を謳い、小競り合いを繰り返す周辺国を攻めては、次々と地図を塗り替えた。そうして、サンテリアを比類なき大国へと成長させた。彼は無敗の王だった。

一方、ユージェス二世はいつも難しい顔をして防衛に追われていた。幸いにもセヴィツとサンテリアの間には広大な川があり、過去において、両国間の戦争は先に川を越えた軍勢が敗北する決まりだ。マディウスは敗戦を恐れたのか、攻めてくることはなかった。

結婚適齢期を迎えた姉たちはひとり、またひとりと国内の基盤を固めるため、有力な貴族家に嫁いでいく。

（人生って何があるかわからないものね）

結局、ユージェス二世は自らサンテリアに同盟の提案を行い、リュミアを差し出そうとした。

相手国の武器開発に進展があったことが要因だった。リュミアを適当な相手に嫁がせ、彼の手元に適齢期の王女がひとりもいなくなる事態を恐れたという一面もある。

（マディウス王も、臣下にうるさく言われて限界だったのかもしれない）

リュミアは歴史あるセヴィツ王国の王女である。兵力や国力は今のサンテリアに劣るものの、周辺では一番大きな国だ。肩書だけで言えば、最もマディウスの妃にふさわしかった。

おまけに、策略に長けたユージェス二世はリュミアの価値を高めようと大層な噂を流した。

『ガルトリン王家の最高傑作』『珠玉の美貌』など、サンテリアに出入国する商人を金で買収して貴族の間に広めたという。

（でも私はきつと、彼に失望してしまうわ）

同盟が決定した後、送られてきたマディウスの肖像画を思い出す。彼もまた美丈夫と噂ではあったが、リュミアの想像以上だった。

額縁に収められていたのは、神秘的な銀髪と、希少な金色の瞳を持つ王の姿だ。凛々しい眉から続く鼻筋の通った端正なつくり。あまりに美しい王の姿に、リュミアはますます怖くなった。

リュミアについての噂は、虚飾に満ちている。何とか外見だけは評価されてきたが、リュミアの自己評価は低かった。金の髪や青い瞳は王侯貴族にありふれている。顔のつくりは、鏡を見るたびにもっと目が大きくあれば、鼻が高ければと気になる箇所だらけだ。歌や詩、刺繍、教養、立ち居振る舞いは何ひとつ姉たちに勝てていない。

天賦の美貌に恵まれ、数々の実績がある王に嫁ぐ未来を思うと、リュミアの胃はきりきりと痛んだ。

何といってもマディウスは三十五歳。今までに数多の美女を目にきただろう。誘惑もあったはずなのに、それらを全て撥ね退け、色めいた噂のひとつもないのが彼なのだ。

セヴィッツの機密情報部は、万難を排すために彼の女性関係を調べ上げ、リュミアに報告をした。それによると、ここ数年、マディウスには愛人のひとりも存在しないという。調べられる限りを尽くしたが、彼が女性を寝室に招くか、お忍びでどこかへ出かけたという事実も見つけられなかったそうなのだ。

男性の欲望についてリュミアは詳しくはないが、生真面目な彼らや同席していたユージェス二世の顔色からして、これは由々しき事態らしかった。

「ううっ……」

「大丈夫ですかリュミア様？ 馬車酔いがひどいようですし、休憩を取りましょうか？」

「いえ、問題ないわ」

「せめて飴をどうぞ」

「ありがとう」

ダイアンから酔いに効く飴をもらい、リュミアは目を瞑った。菓草の清涼感と甘味が口内を爽やかにしてくれる。

（聞の講義を思い出して気分が悪くなってしまったわ。私が潔癖疑惑のあるマディウス王を誘惑す

るなんて無理よ）

結婚が決まるまでは基礎的な教えのみだった閨事について、出立まで追加の講義を受けたのだ。

講師は妙齢の未亡人だった。彼女は詳しい挿絵付きの教本を見せ、なんとしても子どもを授かるのだと熱弁した。確かに、結婚したからには世継ぎを産まなければならない。

同行してくれるダイアンのためにも、子どものいない王妃として肩身の狭い思いをし続ける未来は想像しなくなかった。

国境を越えて

やがて一行は、国境を越える川沿いまで三日かけて移動した。セヴィッツとサンティアリアは、ロジアーナと呼ばれる川によって区切られている。

ロジアーナ川は河口に近づくにつれてその幅を増し、首都付近では向こう岸が見えないほどの広さとなるが、川上となるこの場所では狭かった。

セヴィッツとサンティアリアが共同で建築した石橋が架けられ、両端にはそれぞれの国の関門がある。また、すぐ近くにはユージェス二世が建てた巨大な要塞が聳え立ち、堅固な防衛力を見せてついていた。

「こんな機会でもなければ、この要塞を目にすることはなかったかもしれないわ」

リュミアは大砲や物見塔を珍しく見上げながら、狭い階段を上って要塞の住居部分に上がった。

中には上位貴族が泊まるための貴賓室があり、悪くはなかった。

窓からは、儀式の準備のために石橋を往来する官吏などを眺めることができた。雨が降り出した、リュミアのため息が窓ガラスに曇りを与える。

「普通の人たちは簡単に行き来できるのね……」

しかし今のリュミアは平和の象徴、セヴィッツの花嫁だった。容易に国境線を越えることは許さ

れない。今回の同盟に際し、有識者たちが考えた一定の儀式が必要とされた。

雨が続けていたため、花嫁引渡しの儀式をするにはふさわしくないとされリュミア一行はこの要塞で数日を過ごした。

ようやく雨雲が去ると、洗ったように清々しい紺碧の空が広がった。ついに花嫁引渡しの儀を行うと決定がなされ、リュミアも準備をして外務官らの指示を待った。

橋の両端には軍の関係者など、おびただしい見物客が集まり、針でつければ割れそうな緊張感があった。国境線の向こう側にはサンティアリア側の面々と、大司教が待ち受けていた。

橋の中央、国境線が引かれた場所までリュミアはゆっくりと歩を進める。

前日までの雨によって川の水嵩は増し、激しい音を立て、怒濤の勢いで海へと流れていた。

国の境目には儀式のために特製の水盤が置かれ、まずセヴィッツ側の大司教が祈りを捧げた。次にサンティアリアの大司教がまた水盤に祈りを捧げた。

両国の国教は聖職者たちの地道な活躍によって、幸いにも同じ神を信奉するものであり、聖典の解釈にも違いはない。手に手を取り合うことを訴えてきた彼らだが、大司教が揃うことは初めてだった。

リュミアは水盤に両手を浸し、静かに目を閉じた。両国の象徴として過去を洗い清めたのだ。

水から手を上げたリュミアはサンティアリアの大司教にそっと手を取られ、彼の国へと足を踏み入れた。国境を越えたからといって、靴を通して伝わる足元の感触に違いはない。ただし、後戻りはできない。振り返ることも許されなかった。

とうとう越えてしまった、と万感の思いがこみ上げる。

ここでリュミアを囲む護衛の顔ぶれが一新した。セヴィッツの赤い制服の騎士たちは後ろに残り、代わりにサンティリア国の青い制服の騎士たちが敬礼ののち、隊列を組む。

その後ろには外務大臣と文官、記録官と侍女のダイアンが続いた。

「リュミア王女殿下の行く先に幸運がありますことを」

背後で、セヴィッツの近衛騎士団長が声を張り上げる。

「幸運がありますことを！」

そして騎士たち全員が唱和すると、一斉に空に向かって剣を掲げた。

見物客が大歓声をあげ、「サンティリア万歳！」と何度も繰り返す。

リュミアがサンティリアの関所を通り抜けて要塞に入ると、物々しい場に決して似つかわしくない、華やかなドレスを着た女性たちの出迎えがあった。

中心にいる、栗色の髪を結い上げた女性が一步前に進んで礼を執る。

「王女殿下、サンティリアによるこそおいでくださいました。私は王宮にて女官長を務めておりますエリアーヌ・デュクロと申します」

「ついにお会いできて光栄です、デュクロ夫人。このような遠方までお出迎えくださり、ありがとうございます」

彼女とは要塞に在る間に書簡で挨拶を交わしていた。リュミアは微笑み、デュクロ夫人の緑色の瞳を見た。場数を踏んでいそうな三十代後半の貴婦人なので、そうそう真意は読み取れないが、

リュミアが見る限りは好意的だった。

「ここからは私たちが王女殿下のお世話をいたします。同行のダイアン様もお着替えください」

リュミアはダイアンと視線を交わし、そと離れた。

今まで着ていたセヴィッツ式のドレスは、濃い色の無地の生地白いレース編みを縫い付けたものだ。

レースに使う糸はセヴィッツ特産の絹のように光沢のある綿であり、伝統の編み目模様が美しいレースは民族の誇りであった。旅装の簡易ドレスであっても、もちろんレースは付けられていた。これらを脱ぎ捨てなければいけないのだ。

リュミアはダイアンとは別々の部屋に案内された。着替えのための台に上がり、顔なじみのない女官に下着まで脱がされると屈辱感が否めなかった。

(でも、これでセヴィッツという国はきちんと残るのだから)

リュミアは冷たい空気に鳥肌を立て、奥歯を噛みしめる。

必要なことなのだ、国を出る前に説明を受けた。全てリュミアが非難されないため、サンティリア国民に受け入れてもらうためだという。なぜなら、サンティリアが周辺国を呑み込み、現在の大国になるまでには何度も戦争を行った。その間には国民の尊い犠牲があった。

また、サンティリアに併合された数多の国は誇りを失い、屈辱を味わった。

だというのに、安寧を味わっていたセヴィッツ国の王女が、ちゃっかりとサンティリア王妃の座に就くのだ。リュミアの意志に関わらず、世間にはそう見られてしまうのだから、衣服程度は言

われるがまま捨てなければならなかった。こうした逸話は人から人へと伝わり、民意を養うのだという。

せめて、と侍女ひとりの同行と馬車一台分の荷物を持ち込みが許可されただけで感謝しなければならなかった。それは全て、マディウスの温情によるものだった。

ドレスの着付けが終わり、リュミアは壁面に設えられた大鏡に映る姿をじっと見つめる。

(きれいな)

サンテリア式のドレスは布地からして繊細な花柄の染付がされており、全く違う先進的な様式だ。胸元は大きく開いて、女性らしさを強調する。スカートはいくつものヒダがつけられ、裾に向かって優雅に広がるよう作られていた。

デュクロ夫人が女官に合図をすると、恭しく小箱が運ばれてくる。

「こちらをどうぞ。国王陛下からのささやかな贈り物です」

小箱の中には、幸運のモチーフである星型のチャームと、澄み切ったダイヤモンドがいくつもちりばめられた繊細なプレスレットがあった。淑女にプレスレットを贈ることは珍しいが、馬車での移動中に邪魔にならず、リュミア自身が眺めて楽しめるよう選ばれたのだろう。

添えられた小さなカードには「無事の到着を祈って」という短いメッセージと共に、マディウスの署名が書かれていた。

「まあ、ありがとうございます」

「お礼は陛下に仰つてくださいませ」

左腕に着けてもらいながら、リュミアは彼の直筆カードをじっと見つめてしまう。同盟締結に関する書面にあった国王の筆跡と同じで、妙な感動があった。

「身ひとつでいらつした王女殿下を慮り、王宮にはもつとたくさんのおもてなしの贈り物を用意してございます。陛下は本当に王女殿下のご到着を心待ちにしていますから」

「そうなのですね。デュクロ夫人は、国王陛下とよくお言葉を交わすのでしょうか？」

「ええ。長い間、王妃の座が空いていましたから、賓客のおもてなしや祝宴に関して、及ばずながら私が指揮を執っております。ですが、殿下が王妃になられた後は、殿下の指示に従います」

彼女は微笑みを浮かべ、隙のない返答をする。

「マディウス王陛下がどのような方なのか、差し支えなければ教えてください。私は未熟なものですから、心の準備をしておきたいのです」

まともに答えてくれる可能性は低かったが、リュミアは質問せずにいらなかった。彼から温かな歓迎のしるしを受け、どうしても期待感が高まってしまふ。

生まれた国を離れた今、リュミアが頼れるのは彼だけなのだ。期待しすぎたあとの失望を味わいたくなかった。

「最も尊敬できる方です。お会いになればすぐにわかって頂けるでしょう」
デュクロ夫人は笑みを深めた。

また四日間、移動の日々となった。最初は警戒していたリュミアだったが、デュクロ夫人たち女官は、本当に親切だった。不便がないよう世話を焼いてくれる彼女たちに対しての感謝はもちろのこと、このような素晴らしい人を送ってくれたマディウスへの好意が降り積もった。

いよいよ首都が目前に迫ると、リュミアは貴族の屋敷に案内される。首都の入り口から王城まで、パレードを行う予定が組まれていた。より一層豪華なドレスに着替え、リュミアは飾りつけされた金の馬車に乗り込んだ。ダイアンの同乗は許可されなかったため、彼女は別の馬車で一足さきに王宮に行く手筈になった。

金管楽器の音色により、パレードは賑やかに開始した。小太鼓やシンバルも打ち鳴らされる。屋根のないオープンスタイルの馬車から、リュミアは沿道に居並ぶ人々に手を振った。顔に微笑みを貼り付け、サンテイリア国に來られて嬉しくて仕方ないと演技した。

サンテイリア国の旗を振る人たちもまた、嬉しそうな笑顔だった。平和の訪れを祝っているのか、あるいは自国の事実上の勝利を祝っているのかもしれない。へりくだって王女を差し出したセヴィッツに、サンテイリアは戦わずして勝ったといえるからだ。狂乱に近い喜びようだった。

リュミアがここまで人を喜ばせたことはなく、少しでも誇らしかったが、空恐ろしい感じも

あった。

たとえば戦争に勝って凱旋したマディウスを迎えるのならともかく、リュミアには実績がない。なにか成し遂げたわけでもなく、全てはこれからなのだ。

重圧に潰されそうになりながら、ゆっくり、ゆっくりと馬の歩める最低速度で馬車は進む。

九年前に遷都した新しい街並みは洗練され、目抜き通りは広く美しかった。

これもマディウスの偉大さの一部なのだろうと、気が遠くなりながら、リュミアは笑顔で手を振った。ようやく王宮の姿が目に入り、噴水のある前庭を通るときには疲労困憊していた。

王宮に入るとまず侍従長の挨拶を受け、案内されたのは応接室だった。長椅子と低いテーブルが置かれ、お茶の用意がされていた。先回りしていたデュクロ夫人も現れ、いたわりの笑みを浮かべる。

「まずはこちらでしばらくお休みください、ただいまダイアン様を呼んで参ります」

彼女は紅茶をカップに注ぐと、静かに退出する。騎士たちは部屋前で待機しているので、ひとりきりだ。これは大いに衆目に晒されたリュミアにとってありがたかった。

（ああ……やっとひと息つける）

紅茶を飲み、リュミアは長椅子の背もたれに寄りかかった。力を抜けるのは何時間ぶりだろう。ただ、サンテイリアの人々にきちんと良い印象を与えられたかどうか、気がかりでならなかった。リュミアは凝り固まった頬を指で揉みほぐした。安静にしているのに、まだ心臓はドキドキと落

不着かない。

聞き慣れた早いリズムのノック音がして、ダイアンの来訪を知る。

「どうぞ」

「リュミア様、大変お疲れ様でした」

「ダイアン、ここに座って」

リュミアは横の座面を叩き、ダイアンに横に来てもらう。彼女もここに来るまで気苦労があったのだろうが、見慣れた黒い瞳に安心感を覚える。

「ダイアンも大変だったかしら？」

「特にそういったことはありません。私はお先に王宮入りして、内部を案内してもらっただけです」
「それならよかったわ」

「リュミア様のパレードはどうでしたか？ 許されるなら私も沿道から手を振りたかったのですけど」

「フツッ、もしあの場にダイアンがいたら噴き出してしまうわね」

彼女の冗談に、少し心臓が落ち着いてくるのを感じた。

（安心したら眠くなってきちゃった）

緊張の糸が切れたリュミアは手で口を隠しつつ、小さなあくびをした。そこへ、望んでいないノックの音がした。

「国王陛下のおなりです」

従者の声に反応し、慌てて立ち上がった。長椅子から数歩進み、頭を下げて待つ。

（マディウス王が来たの？ ここに？）

疑問ではあるが、文句は当然言えない。数人分の硬い靴音がバラバラと続き、リュミアはまた心臓の鼓動が速まるのを感じた。緊張してしまう自分を叱咤し、初対面から失敗したくない、と挨拶の言葉を脳内で繰り返す。

「おもてを上げよ」

低く落ち着いた声がかげられ、これがマディウス王かとリュミアは恐る恐る顔を上げた。

「寛いでいるところを邪魔してすまない、早く挨拶をしたくてな」

マディウスは輝く銀色の髪と金色の瞳を持つ美しい王だった。リュミアが肖像画で見た通り、いやそれ以上に威厳があり、それでいて奇跡のような穏やかさが滲み出ている。軽く目を細め、口の端は品良く上がっている。

「国王陛下にお目にかかれて光栄です。リュミア・クラウゼ・ガルトリンと申します」

大きくふくらんだスカートをつまみ、丁寧にリュミアは礼をした。

（え？）

違和感にリュミアは瞬きを繰り返し、それからギュッと目を閉じて開く。マディウスの身長は高く、見上げなければ気づかなかったが、マディウスの頭に見えてはいけないものがある。

（何かしら、作り物じゃないわよね）

マディウスの頭に、三角の耳がふたつ生えていた。髪の色と同色の細い毛に覆われた、限りなく

猫のような耳だ。三角の頂点にある房毛は、リュミアに興味があると言いたげに天井に向かってピンと立ち、作り物ではない証に微かに動いている。そして、マディウスは全体に色素が薄いため、皮膚の薄い耳の内側は血管がうつすら透けてしまっていた。

(大人の男性なのにそんなにピンクでいいの!?)

リュミアはかわいらしい耳に夢中になった。マディウスは表情こそ穏やかだが、実は緊張しているのかもしれない。血色のよい耳はピクピクと細かく動き、周囲の状況を漏らさず聴き取ろうと努めていた。

「どうかしたのか？」

「申し訳ございません、立ちくらみを起こしてしまつて……」

「それはいけない。さあ座つて」

促されるまま、リュミアは倒れるように長椅子に腰かけた。

「リュミア様、お水を飲まれますか？」

「いえ、いいわ」

ダイアンが心配そうにリュミアの背中を擦る。彼女にマディウスがどう見えているか聞きたいところだが、今はそうもいかなかった。

(私ったら、レオポルト恋しさにマディウス王の頭に猫耳を見出してしまったのかしら？ まるで神話に登場する獣人のように見えるけれど)

古い神話には、獣人という体の一部が獣になった生き物が登場していた。だが、彼らは人間との

争いによって絶滅したはずだった。それにリュミアが出発前に穴が開くほど見つめたマディウスの肖像画に、猫耳は描かれていなかった。彼が獣人という話も聞いたことがない。

心労が重なった自分の無意識が作り出した幻、とリュミアはひとまず結論を出した。

愛らしい猫耳付きの王の姿に、リュミアは少しだけ緊張がほぐれていく。

「疲れるのも当然だな。パレードは予想以上の賑わいだつたそうだが、大観衆に囲まれるのは私でさえ気疲れする。外国の王女であれば気の休まることはなかっただろう」

「お気遣い痛み入りますが、御国の皆さまは大変心温かく迎えてくださいました。きっと移動の疲れによるものでしょう」

体勢を立て直し、向かいに座ったマディウスをもう一度見た。彼の頭にやはり、はっきりと猫耳が見える。通常の人間の耳がある部分は豊かな銀髪で隠され、確認はできなかった。

「そうか。どちらにしても、大変な重責であつた。このあと予定されていた接見を省略するので、晚餐までゆっくり休んでもらいたい」

「そのようなこと……」

いざ対面してみると、彼は想像以上に紳士的で優しかった。立ちくらみや移動の疲れという嘘を信じ込み、予定まで変えてくれるという。

(デュクロ夫人が言っていた意味がわかるわ……素敵な方。私の変な妄想なんていらなくらい)

「こうして無事、顔を合わせたのだから問題ない」

「ご厚意に心より感謝いたします」

「そう固くならずともよい。と言っても難しいか」

マディウスはフツと小さく笑い、片手を上げて何かの合図をする。後ろに控えていた数人の騎士のうち、オレンジ色の髪をした若い騎士が前に出た。新緑色の大きな瞳を持つ、柔和な雰囲気の青年だ。

「彼は若いが大変優秀で、私が最も目をかけている騎士のひとりだ。このニコラを王女の専属騎士に付けよう」

「ニコラ・オブライエンと申します。全身全霊をかけて王女殿下の身边をお守りいたします」

「よろしいのですか？」

王のお気に入りから外れ、自分の専属騎士になって不服はないのだろうかと案じ、リュミアは彼と目を合わせる。ニコラの新緑色の瞳は、使命感に輝いていた。

「ニコラを連れて歩けば、私の歓待が誰の目にも明らかにになるだろう」

優雅に微笑むマディウスだが、両耳は誇らしげにピンと立っていた。

（ダメ、かわいすぎるのよ）

リュミアは心の中で悶絶した。あの耳の間を撫でて褒めてあげたくなってしまう。

「では、晚餐までゆっくり休んでくれ」

マディウスは残りの騎士を引き連れ、サツと部屋を出ていった。リュミアは礼をして見送りつつ、その後ろ姿に尻尾がないかと目を凝らす。残念ながら分厚い生地のマントに阻まれ、尻尾は確認できなかった。

（獣人なら尻尾もあったはずだけど……）

ふと指示を待つニコラに気づき、リュミアは着席を促す。

「僕は立ったままで問題ありません」

「いえ、あなたと仲良くなりたいし、色々聞きたいこともあるから座ってちょうだい」

「では失礼いたします」

質問の受け付けも任されているのか、ニコラは自信ありげに、姿勢良く腰を下ろした。

「陛下について聞きたいの」

「はい、やはりそうですよね」

「……国王陛下の外見で、最も特徴的なのはどこだと思う？」

意外な質問だったのか、ニコラは目を瞬かせた。見ればわかることをなぜ、と首を傾げさえる。「いつも陛下のお傍にいたのでしょうか？ ニコラ卿の口から聞かせてちょうだい」

リュミアは詰め寄った。猫耳が幻である可能性は限りなく高いが、その分、自分の目にマディウスが正しく見えていない懸念があった。

「では僭越ながら、申し上げます。陛下は何と言っても希少かつ美しい銀髪と、王者の風格を兼ね備えた金の瞳が唯一無二の特徴と存じます。私の幼少期よりずっと憧れの方です」

「貴重な意見をありがとうございます」

彼の抱く、マディウスへの尊敬の念はよくわかった。マディウスが美しい王であることも。だがやはり、耳についての言及はない。

「ダイアンは陛下の外見についてどう思う？」

初めてマディウスと対面したダイアンの意見こそ重要だった、と水を向ける。しかも同国の人間だ。

ダイアンは知り顔で唇の両端を引き上げた。

「リュミア様がなぜそのような質問をするか、わかっていますよ」

「え？」

「初めての恋に落ちたのですね」

「そ、そうじゃなくて……」

「ふふ、照れているんですね。でも、その紅潮したお顔と瞳の輝きが全てを物語っています。確かに、サンティリア国王陛下は絵姿を遥かに凌ぐ精悍さで、素晴らしく魅力的な方でしたからね。優雅でありながら、隙のない王者の豪気に私などは威圧されてしまいました」

「豪気というか、ダイアンも何か見えたの？」

「見えるものではなく、感じたのです」

ダイアンに聞いたのは間違いだったな、とリュミアは途中から気づいた。彼女自身が鍛えていることもあり、ときどき訳のわからないことを言う。しかしニコラは感激したかのように破顔した。

「あなたはお目が高い方ですね！ 陛下の魅力をそこまでわかってくださるとは」

「輝く存在を前にして、どうして惹かれずにいられましょう？」

ニコラとダイアンは意気投合したらしく、大いに盛り上がり始めた。

（あの最高にかわいい猫耳について誰も言わないところをみると、私だけに見えているのね……幻ならいいけど、彼がもし獣人だったら大問題よ）

獣人と人間の違いは、耳や尻尾しっぽだけではない。獣から人へと自在に変身するため、魔法が使えるという点で大きく異なっていた。人間は魔法が使えない。だからこそ獣人は忌み嫌われ、二つの種族の間で争いは絶えなかった。

古代から伝承された神話において、獣人は怪しげな魔法で人間の心を操り、悪さをする役どころだった。

特に魔力が強い獣人は、王家に入り込んで王が王妃になりすまし、権力をほしいままにする。そういった神話は子ども向けのおとぎ話にもなっていたし、幼い頃のリュミアのお気に入りだった。

最も心惹かれた話は、美しい女性になりました猫の獣人が、伴侶を亡くした王の新しい妃きごうとなる話だ。挿絵の猫耳がついた王妃はかわいらしくも美しかった。王妃は贅沢ぜいたく三昧の日々を送るが、最後は賢い王子に見破られ、退治されてしまう。

（もしかして、私に流れる王家の血のおかげで見破れているとか……？）

勘ぐりすぎかもしれないが、今回の興入れに際し、リュミア以外のセヴィッツ王族の同行は許されなかった。

（なんて、ね）

リュミアは必要以上に想像を膨らませる自分に気づき、笑ってしまう。

マディウスはおとぎ話の獣人のように、贅沢の限りを尽くして国を食い荒らしていない。むしろ

国を栄華に導いた賢王だ。妙なことを言い出せばリュミアの立場が悪くなるだけなので、黙っていることに決めた。



ひとしきり紅茶や茶菓子をつまみに質疑応答を済ませ、リュミアたちはこれから使う予定の部屋へと向かった。

「ご案内するのは、王妃の部屋となります。続き部屋が夫婦の寝室となっていて、そちらは式まで鍵をかけています」

打ち解けたニコラは先を歩きながら、楽しそうに説明をした。ただ、夫婦の寝室と言われるとリュミアは恥ずかしくなる。

（結婚式のあとに初夜があるのよね。よく考えたら、陛下は体がすごく大きくて逞しい方だったわ。あんな方と私が……）

リュミアの身長は平均的だが、全体的には華奢である。マディウスに抱かれる想像を途中までしてしまい、はしらないと首を振る。

（だけど……、聞となれば、さりげなくあのお耳に触られるかもしれない）

それ以外に国王マディウスの頭に触れる機会などないだろう。リュミアは、そのときが早くやって来ないかと期待に胸を膨らませる。先ほどの時間はあまりに短かった。彼ともっと話したいし、

触れてみたい。

「殿下のお荷物は運び入れているはずですよ。それから、殿下付きとなる侍女も待機しています」

自分の考えに耽っているうちに、両開きの立派なドアの前にたどり着いていた。ニコラは金色のドアハンドルを開け、中へと招き入れる。

中には二人の侍女が整列しており、行儀よく礼をしたあとに自己紹介をした。それぞれバルテ侯爵夫人、ボナール伯爵夫人と既婚の女性であった。年齢はともに三十代頃と見えた。

「殿下、まずお着替えをされますよね？」

「はい」

リュミアが今着ているのは、パレード用の豪華なドレスだ。遠目からも王女らしさが見て取れるよう、袖は大きく膨らんでいるし、スカート部分も同様だ。馬車に座った状態ではどうせあまり見えないのに、木製のパニエまで着けてスカートを広げているので大変だった。

「ドレスルームをご覧ください。きっと驚かれますよ」

ボナール夫人は我がことのように笑顔だった。

バルテ夫人が隣室に繋がるドアを開け、ドレスルームに案内をした。内部には壮観なほど色とりどりのドレスが吊り下げられ、アクセサリーも見やすいよう作り付けの棚に飾られていた。これらが全てマディウスからの贈り物だと言うのだから、リュミアはもう一生分をもらってしまった気がした。

「いかがですか？」

「……こんなに歓迎してもらえると、思ってもみませんでした」

感動で声が詰まり、リュミアは平静さを取り戻そうと息を吐く。正統なセヴィッツの王女として、贅沢に慣れているふりをするべきだった。しかし常識的な王女の品位維持費では、決して持てないドレスとアクセサリーの数に圧倒されてしまった。何よりも、マディウスの心遣いが嬉しかった。

「私には勿体ないほど素敵なドレスの数々です。本当に私が王妃の座に就いてよいのでしょうか」
途方もなく甘やかされた経験がリュミアにはなく、どう受け止めたらいいか混乱していた。
ふたりの夫人は困ったように肩をすくめ、親しげに微笑む。

「もしも国内の令嬢が王妃に選ばれたら、昔の私でもよかったのに、と嫉妬してしまったかもしれません。でも、もう夫も子どももいる身ですから」

ボナール夫人が片手を上げ、指輪を見せた。

「陛下は最良の選択をされたと思います。セヴィッツと戦争になれば、こちらは無傷では済みません。私の夫は軍に所属していますから、毎日心配していたでしょう」

バルテ夫人も指輪を見せ、続ける。

「それがこうして、楽しくお喋りしていただけるのなら何よりですわ」

「そうなのですね、私も争いが起きないことを一番に願っております」

リュミアはホッとした。彼女たちを侍女に選んだのはマディウスか女官長だと思われるが、素晴らしい人選だ。

「それに、陛下がやつとお妃さまをお迎えになる気持ちになつてくださって嬉しいですよ。いつ

まで亡くなられた婚約者の方を追悼されるのか、私などは氣を揉んでおりましたから」

「亡くなられた婚約者の方ですか？」

不意打ちのように出てきた存在に、リュミアの胸の奥がチクリと痛んだ。機密情報部からの報告で聞いてはいたが、国内ではそれほど有名なのだろうか。

「バルテ夫人、いけませんわ」

ボナール夫人に窘められたバルテ夫人は赤面する。

「あ、あら。ごめんなさい、私ったらつい」

「その方について、詳しく聞かせて頂けます？」

「もう二十年も前に亡くなられた方ですわ。陛下が特別にお優しいのか、結婚を避けるために花を手向けているのか、社交界でよく話題に上がっていました。さ、ドレスを選びましょう。晩餐用のものと、今くつろぐためのものと……」

バルテ夫人はパチリと手を叩き、何かを探すように離れてしまった。

柔らかな真綿にくるまれると、小さな棘さえ気になってたまらないものだ。

親切に迎え入れてくれたマディウスの胸に、今も亡くなった婚約者がいるとしたら。

(寂しい結婚生活は嫌だわ……)

彼の気持ちまで望む贅沢な自分を戒めるも、リュミアはどうか自分を引き立たせるものを選ぶうと手近なドレスの裾をつまんだ。

とかく女性の支度は時間がかかり、あつという間に公式晩餐会ばんさんかいの時間となった。

ニコラにエスコートされ、リュミアは広い宮殿を移動した。なお、ダイアンは侍女たちと食事を取るため別行動だ。

（だいぶ体力が回復したと思うけれど、マディウス陛下のお耳はまだ見えるのかしら）

パレードの疲れから幻覚を見た可能性は捨てきれない。今度は猫耳ばかりに気を取られずに、もう少し話をしてみたい気分になっていた。もつとも、公式晩餐ばんさんなので重臣たちに囲まれて堅苦しい話に終始するだろう。

（私が出席者の中で最年少よね。できるだけ大人っぽくしてもらったけれど）

マディウスの以前の婚約者の話は、遅効性の毒のようにリュミアの心をチクチクと刺激している。リュミアは、できれば彼に好かれたい。そのために時間をかけて着飾った。

今夜選んだ濃紺のドレスは、マディウスの髪を思わせる銀糸で刺繍ししゅうが施されている。肩を露出するデザインだが、胸元の切れ込みは深くはない。腰から下はタイトになっており、ふくらはぎ辺りから裾が広がる大人っぽさが気に入った。

「こちらで陛下がお待ちです」

晩餐ばんさんを行うホール近く、控室のドアをニコラがノックした。「リュミア王女殿下がお見えです」と告げ、了承を得てドアを開ける。

晩餐会ばんさんかい

控室の中では、マディウスのほかに二人の男性が寛くわんいで何事かを話していた。彼らの年齢は五十代ほどで、それなりの職位の人たちだろうとリュミアは推しはかる。テーブルに置かれたワインや、火のついた葉巻の匂いが父を思い出させた。

「リュミア王女は晩餐用ばんさんようの装いも美しいな」

マディウスは長椅子から立ち上がり、さりげなくリュミアの手を取った。大きくて温かく、すこしだけかさついた感触だった。

国王であるマディウスに話しかけられたことで、リュミアは見知らぬ彼らにどう挨拶するべきかという問題から解放された。相変わらずの心配りにリュミアはひっそりと感嘆した。

「お褒めにあずかり光栄です。陛下。たくさんドレスをご用意くださって、選びきれないほどでした」

「よく似合っている。実は、昼に会ったときには驚いていた。あなたがあまりに美しくて、言いそびれてしまったな」

面映ゆい気持ちでリュミアは待望の褒め言葉を受け取った。社交辞令かもしれないが、彼に言われると頬が熱くなる。

「身に余るお言葉ですわ。陛下こそ、私にはもつたいたないほど素敵なお方と存じます」

先刻は猫耳に気を取られていたが、マディウスはどの角度から見ても恰好よく、何を着ても見栄えがした。今は銀色のアカンサス模様が浮かぶ黒いジストコールを着ていて、それが広い肩や分厚い胸板を引き立てていた。

（だけど……）

薄目でそうつとマディウスを見上げる。青みのある銀髪からニョキりと生えた三角の耳は、変わらずそこにあった。休憩をしたのに、鮮烈に見えていた。彼の髪や色白の肌と完璧に揃った色合いであり、シャンデリアの光を受けた陰影も見事だ。

（壊滅的に絵が下手だった私が、想像でこんなに上手く描けるはずがないのよ）

リュミアは美的感覚を養うため、幼い頃には絵画を習った。キャンバスのすぐ近くに果物や花を置いて必死に描いたが、対象を観察するほど全体が歪み、膨らみ、おかしくなる。教えてくれた画家は難しい顔をするばかりだった。

（やっぱり彼は獣人で、どうしてか私だけに見えているんじゃないかしら）

彼の醸し出す威厳や包容力が、愛らしい猫耳の存在によって『かわいい』になってしまふ。それでいい、とリュミアは結論つけてしまった。

リュミアが熱心に見つめる理由を知らず、マディウスは猫耳をプルツとさせる。

「ありがとう。私たちは良い夫婦になれそうだ。ヴァンサンとユリエルもそう思うだろう？」
名を呼ばれた彼らは既に立ち上がっていて、胸に手を当て丁寧な礼をする。

「全くその通りです、美しいリュミア王女殿下と陛下に、誰しもが憧れるでしょう」

「ええ、両国の友好は揺るぎないものとなるでしょう」

穏やかな笑みを添えられたので、リュミアは彼らに笑みを返した。

「紹介しよう、宰相のヴァンサン・ブノワと外務大臣のユリエル・シラクだ」

「お初にお目にかかります。セヴィッツ王女リュミア・クラウゼ・ガルトリンです」

「もちろん存じ上げていますとも」

「これからよろしく願います」

マディウスの誘導により挨拶はつつがなく済み、場は一気に和やかになった。

（マディウス陛下は紳士よね。何事も慣れている感じがするわ）

軽く重ねただけの手のひらが徐々に熱くなり始める。彼の体温が高いのか、それともリュミア自身のせいなのかわからないが、汗が出ないように願った。

「陛下、そろそろ……」

マディウスの右後ろから侍従の呼びかけがあり、彼の猫耳の右側だけが器用にくるつと動いた。侍従が何事かを報告している。

「ああ、わかった。移動しないとな」

くつと手を引かれ、マディウスの金色の瞳と真正面から視線がぶつかる。目尻に皺を浮かべて微笑まれ、リュミアもつられて笑った。

マディウスにエスコートされて入場したホールでは、丸くくり抜かれた天井から吊るされる巨大シャンデリアが輝いていた。

壁にはセヴィツツ国一行の到着を歓迎するための国旗が立てられ、向かいの壁にはサンティリアの国旗がある。

真っ白なクロスが敷かれた長いテーブルの最奥に国王マディウスが着席し、その右斜め横がリュミアの席だった。リュミアの横にセヴィツツの外務大臣や補佐官が続ぎ、対面にはサンティリアの宰相や大臣がずらずらと並んだ。また、マディウスの兄のアルベール公爵とその夫人、ひとり息子のパスカルも列席している。

マディウスが直々に紹介してくれるが、リュミアは挨拶をしながら緊張しきりだった。

（この方たちが陛下の兄と甥おとなのね。あまり似ていないし、猫耳もないわ）

アルベール公爵の髪は黒く、瞳も暗い青灰色だった。

「なるほど、これがガルトリン家の最高傑作ですか」

彼から好意的とは受け取れない値踏みするような視線を向けられ、リュミアはそつと息を吐く。

「確かに美しい。なあ、パスカル」

「本当に。特に唇が美しい。咲きたての薔薇ばらのようです」

アルベール公爵の言葉に、うんうんと何度も頷うなづくのは、彼にとってもよく似た息子パスカルだ。彼は二十歳の青年であり、リュミアと年齢が近い。そのため同盟交渉中にはパスカルと結婚する可能性も示唆されていたリュミアだが、彼の失礼な発言にたじろいだ。

（唇について言及するのはこちらでも性的な意味よね……どうして）

わざと失礼な物言いをしたのか何も考えていないのか、パスカルの意図がわからないリュミアは、僅かに首を傾かげ、曖昧あいまいに笑むことしかできなかった。

「パスカルは一日も早く相手を見つけて婚約することだな。もう私に遠慮する必要がなくなったのだから」

助けてくれたマディウスを見れば、猫耳は不機嫌そうな後ろ向きとなっていた。

「陛下が縁談を私に譲ってくださればよかったのに、残念です」

非礼な発言を重ねるパスカルは、リュミアに無遠慮な視線を向け続けている。注意されたことを理解していないのかもしれない。

（私も出来が悪いと言われてきたし、パスカル様のことを悪く思うのはよくないけれど）

僅かな沈黙を埋めるように、給仕によってグラスにワインが注がれた。

「こちらのグラスは大変美しいですね。とても薄くて透明なのに、エナメル装飾が見事です」

リュミアも話題を変えようと明るい声を出した。サンティリア産のグラス製品は、商人によってセヴィツツの王宮にも持ち込まれていた。自国にはない高い技術力を見て、ユージェス二世は激しい焦燥を滲にじませていた。しかも今テーブルの上にあるものは、王宮の晩餐会ばんさんかいに出されるだけあって、以前見たものより遥はるかに精緻な意匠が施されている。

「ああ、ガラス工芸は国策として振興している。特にこのグラスは技術流出を防ぐために持ち出し不可としていたが、同盟締結の暁あけつぎにはセヴィツツにも輸出を開始する予定だ」

マディウスが応じるように、長い説明を始めた。

「技術というものは、ひとりの天才によって革新的に進むことがある。いくつもの国を併合したからこそ、人口が多くなつて千人にひとりの天才を見つけやすくなった。また、ガラスの原料の得やすさはその土地の地質によるのだが、国土が広くなれば困ることはない」

「このグラスは、陛下の偉業の象徴ですね」

リュミアはお世辞でもなく、うっとりとしてグラスを眺めた。

「フツッ、セヴィッツの王女は今までどのようなグラスを使っていたものやら」

「私はすっかり見慣れていますけど、お若い方は何事も新鮮に驚くことができて、羨ましいくらいですわ」

折角よい雰囲気になりかけたが、鼻で笑うアルベル公爵と夫人によってまた台無しになる。

パスカルも悪意があるのかないのか、両親を見てにやにやと口元を緩ませた。

「見慣れるのは構わないが、あなた方が国に対して貢献したものが何かあったのか？」

マディウスは柔らかな微笑みと口調を維持しながらも、猫耳が盛大に後ろ向きだ。リュミアは彼が怒っていると認識した。

（アルベル公爵家の方たちとは敵対しているようね。気をつけなくちゃ）

ようやく全員のグラスにワインが行き渡ると、両国の友好を願って乾杯をし、晚餐が始まった。

酔って変なことを口走るわけにいかないリュミアは、マディウスの愛らしい耳を見ながらほんの少しだけワインを口にした。

会が始まれば、会話は宰相や外務大臣、そして王であるマディウスが中心となり、アルベル公爵一家は黙ってしまった。国政に関わっていないのだろう。

前菜の前の小さな前菜が終わると、次の皿が運ばれてきた。

色鮮やかな素材をガーデンに見立て、絵画のように皿に盛ったものだ。使われているサーモンは両国を分かつロジアヌ川で捕れるため、どちらの国でもよく食べる。ただし、漁のたびに川の東と西で争いが起こっていた。そんな問題も今後は起きなくなるのだから、何より今夜の晚餐にふさわしい食材と言えた。

ただ、配膳された皿を前にしてマディウスの耳がまた後ろ向きとなる。

（何ごと？ 怒っているの？）

誰も気づいた様子はない。話題は同盟締結後、首都に隣接する川に架ける橋のこととなっていて、希望のある明るい話題だ。もしかすると嫌いな食べ物なのかとリュミアは心配するが、マディウスの表情や会話に変化はなかった。

「――両国の行き来がより活発となれば、また新しい文化も生まれるだろう」

「はは、陛下の仰る通りですな」

宰相の追従の合間に、マディウスはナイフとフォークを巧みに操って皿の中身を口に運ぶ。

今までとは違い、全く嚙まずに呑み込んでしまった薄切りの野菜が何であるか、リュミアは見逃さなかった。

（今食べたのは玉ねぎ！ そういえば陛下は玉ねぎを食べて大丈夫なのかしら？）

リュミアは猫が食べてはいけないものを熟知している。レオポルトを飼育するときには詳しい人を招き、玉ねぎ、チョコレート、ブドウは猫にとって毒だと教えてもらった。猫の獣人が同様かは不明だが、マディウスの挙動を仔細漏らさず目撃していた以上、気になってならない。

「恐れ入りますが、陛下」

外務大臣が同盟交渉中の小話を始め、その隙をリュミアは狙った。

「どうかしたのか、リュミア王女。気になることがあるなら何でも聞いてくれ」

なるべく小声で話しかけたというのに、リュミアとマディウスの会話には全員が注目した。

彼は金色の瞳を微かに細め、三角の耳を元に戻しピンと立てている。

（あれ？ よく考えたらお酒も猫ちゃんはダメよね。でも平気そう……）

彼はどうやらワインは好むようで、給仕が何度も注ぎ足していた。

そもそもマディウスが獣人という事実も、本当はまだ定かではなかった。リュミアは一気に顔を赤くする。

「何でもありません、失礼いたしました」

「そうか。未来の妃の質問は、いずれ近いうちに聞かせてもらおう」

マディウスがさらりと流してくれるので、一同の会話はまた再開した。

（陛下ともっと話してみたいわ。お耳のことでもそうだけれど、それ以外のことも）

ふたりの間の会話こそ少ないが、すぐ近くで食事をしているうちにリュミアは心の距離も近づけたように思った。シャンデリアの明かりに照らされ、なお美しく見える銀髪から覗く、猫の耳。そ

れに触れてみたい、とリュミアはため息を吐いた。

（触ったらフワフワですごく気持ち良さそう）

もちろん、国王の頭にはそう気軽に触れられない。リュミアは結婚式とその後待ち受ける初夜が待ちきれなかった。

マディウス秘密

晩餐会が無事に終わると、マディウスは執務室に戻り、書類を片付けながらニコラを待った。リュミアの専属騎士として見知った事柄について、一日の終わりに詳細な報告を受ける予定になっている。

(リュミア王女はずっと緊張していたな)

公式の場に慣れているはずの王女といえども、外国から来たばかりの晩餐会で寛げるはずがない。姿勢を正して微笑みを浮かべ、健気に周囲に合わせようとする姿に、改めて大変な役目を押し付けてしまったとマディウスは罪悪感を覚えた。

ただ、その中でも自分に向けられる瞳には、過分なほど好意が含まれていた。

そもそも苦境に追い込んだのはマディウスだというのに、彼女が会話に困っているところを助ければ、さらきりと瞳を輝かせる。

それは初対面のときから明らかだった。

挨拶のために頭を下げていたリュミアが顔を上げ、互いの目が合った瞬間。それまで彼女の声は緊張と恐怖に揺れていたというのに、瞬きの間に感情を変えた。吸い込まれそうな青い瞳は潤み、小さな唇は微笑を湛えた。演技とは到底思えない豹変ぶりだった。

一目惚れされることはよくあったが、マディウスは今まで最も複雑な心境になった。

リュミアの眼差しに、どこか懐かしさを感じてしまったからだ。譬えていうなら、かつての小さな自分に向けられたものに似ていた。

(ありえないだろう。私が子どもの頃、彼女はまだ生まれてもない)

マディウスはため息を吐き、ペンを置く。嬉しいと思ってしまうような自分に嫌気が差した。

(上手くいきすぎている。何かおかしい)

間もなく結婚する相手なのだから、本来は好き合って問題ない。だがマディウスは、リュミアに心を許すわけにはいかなかった。

頭に手をやり、柔らかな毛に覆われた猫の耳を押し潰す。この秘密を、リュミアに教える気はなかった。結婚した後も、生涯にわたって隠し通さなければならぬのだ。

マディウスは、自身が獣人であるという罪の意識に苛まれていた。そのためにあらゆる縁談を避けてきた。

そんなマディウスの元に、リュミアとの縁談が転がり込んできたのはおよそ二年前のことだった。王女を差し出すので、ぜひ同盟を結んで欲しいとセヴィッツ国王、ユージェス二世の書簡を持った使者がやって来た。彼らは聖職者の伝手を用い、本物であると証明した。

丁度、武器開発の部門が大砲の飛距離を伸ばすことに成功した頃だ。セヴィッツに攻め込むつもりはなかったが、強固な防衛線を持つセヴィッツがすり寄ってきたことに、マディウスは満足した。

宰相や大臣らもこれは、と喜色を隠さなかった。

同盟は国益に適う話だが、それ以上に彼らはマディウスを結婚させたがつっていたのだ。後継者としては一応甥がいるものの、彼は不適格なのではと懸念されていた。

マディウス個人の感情としては結婚を恐れていたが、王としては断る理由が見当たらなかった。

同盟に関しては前向きに、政略結婚は検討の余地ありと返答を持たせ、マディウスは使者を返した。

セヴィッツ側が差し出そうとするリュミア王女に問題がないかどうか、調べる名目で時間稼ぎをしたのだった。マディウスは直属の諜報部隊のほかに、同胞である黒猫にまで依頼し、密偵としてセヴィッツに送り込んだ。

だが、マディウスの思惑とは裏腹にサンテイリア社交界にある噂が立ち始めた。

リュミア王女はガルトリン王家の最高傑作、珠玉の美貌というものだ。

不自然すぎて情報工作であることは明らかではあったが、マディウスはユージェス二世の政治的手腕に感心せざるを得なかった。周囲はますます色めきたち、マディウスに決断を迫った。

美しい王女、というのはどうしてか人々の口の端に上り、民意を高揚させる。

マディウス個人としては、人の顔のつくりにこだわりはない。ただひとつ、健康でさえあれば構わなかったのだが、その謳い文句に昔の約束を思い出し、古傷がじくりと疼いた。ここで決めな

ればならないような予感がした。

だが、それだけで顔も知らない、若い王女との結婚を決めていいのだろうかと思ひ至る。王女を物のように扱う政略結婚への抵抗感を言い訳に、結論は後回しとなった。

やがて送り出した諜報部隊が一部帰還して、リュミア王女の詳細を知った。

美貌については噂のとおりであり、何よりも重要である健康状態に問題はない。

幼少期は活発だったが今は落ち着き、父母の言いつけによく従っている。難があるとすれば、教養関係。決して悪くはないが、良くもない。そのためなのか、同盟交渉が始まって以降は自室に軟禁状態となり、ひたすら決定を待っている状態だという。

まだ迷っていると、追うように同胞からの報告書が届いた。それは各地の仲間を経由して、小さく折られた文の状態で届けられた。マディウスが謎の緊張に胸を高鳴らせて紙を開くと、実にふざけた内容だった。

『俺はリュミアに毎日かわいがられて最高。幸せすぎて連絡が遅れた。もうしばらくこのまま暮らしたいから結婚はできるだけ引き延ばせ』

マディウスは読んだ瞬間、常日頃の冷静さを忘れてグシャリと文を握りしめた。あまりにこちらの苦悩を無視した内容だったからだ。

もっとも、必要以上の苦勞を背負い込んだのはマディウスの自業自得で、彼は付き合ってくれて